

「釜ヶ崎 1980年冬」 正 誤 表

ページ	段・行	誤	正
4	8	キリスト教釜ヶ崎 医療連終会	キリスト教釜ヶ崎 医療連絡会
11	下・19	中沢 清美	中西 清美
23	上・4	20ページ	22ページ
25	下・10	相 該 室	相 談 室
25	下・24	表1～表	表1～表23
26		何をしたか	何をしたいか
49	上・6	事 体	自 体
52	中・22	問 題 的	問 題 点

釜ヶ崎 1980冬 もくじ

第11回釜ヶ崎越冬闘争支援を終えて……………	2
越冬日録 1980, 11~1981, 2……………	5
今年の越冬の特徴……………	10
初めて越冬に参加して……………	15
炊き出し統計グラフ……………	18
青カン統計グラフ……………	19
越冬闘争よびかけビラ……………	20
第5回越冬セミナー報告……………	22
釜ヶ崎結核患者百人のアンケート調査……………	25
入佐さんの活動日記……………	41
患者交流会……………	42
新しい労働者の家……………	44
総括集会……………	45
新聞から——殺された結核患者——……………	54
越冬委員会専従として……………	57
編集後記……………	58

写真 中川繁夫
カット 武内司郎

第十一回釜ヶ崎越冬闘争支援を終えて

はじめに

キリスト教のグループが越冬闘争支援をはじめ、今年は何回目になる。最初の一回（一九七四年度）は、協友会が単独で支援にあたった。以後の六回（一九七五年度）は、協友会と関西キリスト教都市産業問題協議会が共同で活動した。一九七七年以後は、合同で、キリスト教釜ヶ崎越冬委員会を組織し、労働者が組織する釜ヶ崎越冬闘争実行委員会の諸活動を支援してきた。

今年も、労働者の組織が、釜ヶ崎日雇労働組合を中心とするグループ（夜間パトロールなど）と炊き出しの会、結核患者の会を中心とするグループ（炊き出しなど）に分れて活動したが、わたしたちは両者のグループと連絡をとりながら、支援活動を続けた。労働者の組織が一本化しなかったことで、支援するわたしたちは、正直なところいろいろな点で困難に出あった。しかし、わたしたちは、一九八〇年十一月十五日にキリスト教釜ヶ崎越冬委員会を組織し、一九八一年二月二十八日まで、支援およびわたしたちの越冬テーマ「釜ヶ崎の医療―特に結核」に焦点をしばり、活動を続けた。三月以降は、キリスト教釜ヶ崎医療連絡会に改組し、引き続き労働者の結核

の完治を求めて働いている。

行政への要請

わたしたちは、労働者自身の行政への要請とは別に次の二点を大阪市長に要請した。ときあたかも「人権週間」であり、わたしたちは、回答に期待をもったが、結果は無惨であった。

「わたしたちは、釜ヶ崎の労働者がかかえている諸問題は、単に『社会福祉問題』ではなく人間の尊厳にかかわる『社会正義の問題』ととらえています。人権週間にあたり、大阪市が、釜ヶ崎の労働者の人権を視野に入れた人権行政を今後おしすすめることを特に要望します。

(一) 今冬は、社会医療センターの軒下や路上で病弱・高齢・「障害」の労働者が青カン（野宿）しなくてすむ、血のかよった人間尊重の行政を大阪市は、どのようにすすめますか。

(二) 結核予防法第二条を守り、釜ヶ崎から結核を根絶するために、大阪市は民間のボランティア活動に甘えることなく、抜本的対策を立て、明らかにしてください。

以上の二点について具体的な対策を来る十二月二十五日まで文書

で回答ください。

一九八〇年十二月一日」

この要望に対する大阪市の回答は、民生局からの次のような電話一本であった。

「十二月二十九日、三〇日に大阪市更生相談所で面接・受け付け（筆者註 病弱・高齢・「障害」の労働者）を行い、臨時宿泊所（大阪南港）に八〇〇人、病弱者は自彊館に二〇〇人収容する」（十二月二三日午後）

この不当な回答に対しては充分な対応ができなかった。しかし、結核に対しては、労働者グループと共闘し、第一回一九八〇年十二月二十六日対西成保健所、第二回一九八一年一月十七日対大阪市環境保健局と話し合いを持つことができた。これには、民生局よりいくらか人間的な応待があった。この二回の話し合いは、あらかじめ要望書（十二項）を出し、それに基く交渉であった。要望は、「入院必要患者の結核ベットを保障せよ」「夜間にもレントゲン検診（月一度西成保健所は、地域にバスでレントゲン検診に来るが、それが月末の十時～十二時で労働者が集りにくい）を行い、結果はすぐ本人に知らせよ」「釜ヶ崎労働者の結核入院患者の追跡調査を行ない、その結果を公開せよ」など、ごくあたり前のものであったが、保健所・環保局は言を左右に確答をさせた。わたしたちは、行政が、結核予防法を遵守する気持ちがあるのかと疑わざるをえなかった。

釜ヶ崎の医療―特に結核

一九七八年度の越冬以来、わたしたちは釜ヶ崎の医療とくに結核に焦点をあわせて活動して来た。その具体的な歩みの一つが、昨年

度からはじまった結核ケースワーカー入佐明美さんの活動である。入佐さんは、七九年度の越冬後も社会医療センターでの実習、結核患者との面接、地域内（公園や路上）における労働者の医療相談など年間を通じて釜ヶ崎の結核と取り組んできた。活動の一端は、社会医療センターの手でまとめられた「大阪社会医療センター通院患者における要入院肺結核患者の社会医学的調査（第二報）」に見ることがができる。

わたしたちも年間を通して、病院訪問あるいは入院患者交流会などを計画し実施した。このような努力にもかかわらず当初の目標―一人の結核患者が完治し、自立して生活していくという結果をうることはできなかった。

八〇年度の越冬では、前年度の活動の反省のうえにたち、「一人の結核の労働者が完治していく」を合言葉に越冬活動に入っていた。もちろん例年通りに夜間医療パトロールもした。夜間医療パトロールは、一九八〇年十二月二十五日から一九八一年一月末まで続けられた。二月末までとのわたしたちの願いもあったが、労働者グループの方針もあり、パトロールは一月末で終え、二月は昼間の活動に力をいれ、一人でも青カンする労働者をなくすることに力を注いだ。労働者グループの方針は、入院の必要なものは入院治療をうける、労働できるものは就労し、青カンをなくするというもので、一定程度の効果をあげることができたと見えよう。

結核に対する取り組みは、入佐さんを中心に医療相談、入院、病院訪問、退院後の相談などさまざまな活動を続けた。さらにこの活動を充実させるため専任者として土井美保子さんが今越冬から働きはじめた。フルタイムスタッフ二人ということになる。また越冬期

間中に、釜ヶ崎ボランティアの会を結成発足させ活動の側面からの援助の充実を計った。

このような活動が続けるためにも経済的な基盤が必要である。六〇〇万円の全国募金をしたが四月末で六五〇万円のカンパがよせられたことは感謝である。

二月八日に越冬中間報告集会、同じく三月八日には越冬支援総括集会をもち八〇年度の越冬を総括したが、三月からは前述の通り、「釜ヶ崎の医療」をテーマにキリスト教釜ヶ崎医療連終会が発足し十月まで活動を続けることを申し合せている。

しかし、越冬が終わったいま、釜ヶ崎には不況が押しよせ就労できない労働者が街にあふれている。越冬期間中の炊き出し利用者は、一日の合計が二〇〇人強であったが、現在は夜だけで二〇〇人を越える労働者が炊き出しで空腹をしのいでいる。わたしたちは、再度、釜ヶ崎では健康が、労働問題と密接な関係にあることを認識するようにはせまられている。

(一九八一年五月)



▲ 越冬中の炊き出し

1980年釜ヶ崎 越冬目録

1980.11 ~ 1981.2

一九八〇年

11月15日

一九八〇年度キリスト教釜ヶ崎越冬委員会
が結成される。

代表・小柳伸顕 会計・谷安郎
結核ケースワーカー・入佐明美

22日

第二回キリスト教越冬委員会。

募金（目標六百万円）、越冬セミナー、ポラ

ンティアのための結核の話、行政への働きか
け等について話し合う。

26日

越冬闘争実行委員会（越冬実）が結成される。

27日

大阪市は青カン労働者の狩込みをした。

29日

第三回キリスト教越冬委員会。

炊き出しの会等との話し合い。

12月1日

越冬実医療班 第一回会合。

医療券の発行について、期間八〇年一二月二
五日～八一年二月二八日、朝九時の炊き出し
時（但し、一二月二九日～一月三日は医療セ
ンターの都合で一二月の炊き出し後に発行）。

労働福祉センターの一時金支払いは、越冬

実カンパ活動。

第四回キリスト教越冬委員会。

越冬の活動について話しを聞く。

一時金支払日。越冬実カンパ活動。

ボランティアのための結核の話 所…喜望の家

講師 羽曳野病院 山口亘医師

8日

7日

6日

5日

3日

9日

時…一四時～一六時 参加者一〇名
大阪市へ要望書提出。

(一) 今冬、社会医療センター軒下や路上で、
病弱・高令・「障害」の労働者が、青カン
(野宿) しないで済む、血のかよった人間
尊重の行政を大阪市は、どのようにすす
めますか。

(二) 結核予防法第二条(注 結核対策の責任
は自治体行政にあると義務づけている)を
まもり、釜ヶ崎から結核を根絶するため
大阪市は、民間のボランティア活動に甘え
ることなく抜本的対策をたて、それを明ら
かにしてください。

以上の二点について具体的な対策を来る一
二月二五日までに文書でご回答ください。

10日
13日

越冬セミナー委員会
第五回キリスト教越冬委員会

越冬実医療班から報告

・朝九時炊き出し↓依頼券発行↓医療センタ
ーへ↓医療センター紹介状↓一時の炊き出
し後市更相へ↓面接の結果の確認(入院、
却下、その他)全過程が終了するまで一緒
に行動(終了四時半)
越冬セミナー委員会 参加者、予算を決め
る。

16日

18日

第13回(仮称)釜ヶ崎夜間学校
テーマ…越冬と病氣 参加者一四名

19日

支援連帯集会 参加者約九〇名
所…芦原橋解放センター 時一八時～二二時

20日

金井愛明氏がアピール
第六回キリスト教越冬委員会

21日

医療相談・パトロールの責任者を決める。
越冬実・医療センター、消防署へあいさつに
行く。

22日

医療センターへパトロールのための
薬を取りに行く。

23日

入院患者へのクリスマスプレゼント(靴下)
を包装。

24日

大阪市民生局より、大阪市の越冬対策につ
いて以下のような電話があった。

25日

「一二月二九日・三〇日に大阪市更生相談所
で面接・受け付けを行い、臨時宿泊所(大阪
南港)に八百人、病弱者は自彊館に二百人収
容する。」

26日

喜望の家娯楽室・夜間学校が主催し、娯楽
室でクリスマス会が開かれた。参加者約五〇名。

27日

越冬実決起集会 雨で中止
協友会クリスマス

28日

越冬闘争始まる(労働者側が、炊き出しの
会、越冬実に分れている)青カン者総数百一名。

26日

喜望の家倉庫にある布団をセンター前まで運ぶ。

医療センターで診察後市更相へ相談に行くつきそいの労働者を警察妨害、市更相へ入れず、一月六日まで妨害つづく。

越冬実の日常活動

六時・ふとんあげ

七時半～九時・医療券発行

一六時・おにぎりの準備

二〇時・布団敷き

二二時・夜間パトロール・警備

越冬実・パトロール前におにぎり配布一回平均約百五〇個、残りはパトロールの時

持って配る。

炊き出し

九時、一三時、一九時の三回

・年末一時金の支払い（大阪港の会館で）

保健所と団体交渉

参加者 保健所側・次長 保健予防課長 同

係長 西成分室主査 庶務

係など八名。

越冬実側・越冬実 釜日労 キリス

ト教越冬委 被爆者の会など計一一名

・越冬対策について話し合う。

27日

キリスト教越冬委の活動について、医療センター本田良寛氏と連絡をとる。センター前の布団にシノギが出没した形跡あり。

越冬実 医療センター前で徹夜の警備態勢に入る。

第七回キリスト教越冬委員会。

市更相で臨時宿泊所の受け付けを行なう（一〇時～一五時）

越冬実 おにぎり配布にあわせてみそ汁を配り始める。

臨時宿泊所の受け付け。

こどもの里でもちつき大会、臨泊の受け付け

一九八一年

30日

1月1日

2日

第五回越冬セミナー開かれる 参加者一三名

テーマ・釜ヶ崎の医療―特に結核

責任者・ハインリッヒ神父 専従者・入佐明美

第一四回（仮称）釜ヶ崎夜間学校

テーマ・今年の包負を語る 参加者一三名。

越冬セミナー2日め

病院訪問、衣類整理、パトロールに参加等、

入佐さんが一年間取り組んできた結核について話す。

越冬実 三角公園で新春団結もちつき大会

（四斗を二ヶ所でつく）

3日	越冬実 医療券発行枚数一一六枚を記録。 越冬セミナー最終日 バザー、反省会、全員で会食（於…ふるさとの家）礼拝。 第八回キリスト教越冬委員会 中間報告集会 病院訪問体制について話す。 ソフトボール大会 所…東大阪職業訓練所 参加者約七〇名
4日	所…東大阪職業訓練所 参加者約七〇名
5日	大阪市に要求書をもっていき、冬期の対策について話し合いを求める。その後、南港の臨時宿泊所へ行く。 センター仕事始め 三九件二六六人 アブレ （雇用保険）一万二九〇人 青カン者総数一三九人
8日	第一五回（仮称）釜ヶ崎夜間学校 テーマ…「人夫出し」について 参加者一四名 臨時宿泊所 終わり 青カン総数一六五人 第九回キリスト教越冬委員会 中間報告集会について、内容を検討。 青カン労働者に対してアンケート調査を行う。
10日	第九回キリスト教越冬委員会 中間報告集会について、内容を検討。 青カン労働者に対してアンケート調査を行う。
12日	アンケート調査、二日間計一一六名
13日	アンケート調査、二日間計一一六名
14日	越冬実 市民館で「越冬討論集会」参加者約八〇名。
15日	第一六回（仮称）釜ヶ崎夜間学校

17日	テーマ…趣味について語ろう 参加者一一名 大阪市環境保健局との話し合い 参加者 大阪市側…結核予防係長など五人 越冬実側…越冬実医療班、被爆者の会、キリスト教越冬委六人
18日	・結核対策について話し合う。 パトロール時のおにぎり、みそ汁の配布打ち切り。 第一〇回キリスト教越冬委員会 パトロールの状況、越冬実の活動報告等。 炊き出しの会、結核患者の会がデモを行った。
19日	越冬実アンケート再開（三〇日を除き連日） 越冬実 以後医療券発行を医療センター前に止めたバス「勝利号」の中で行なう。
22日	第一七回（仮称）釜ヶ崎夜間学校 テーマ…越冬と病気その2 参加者一二名 島田病院より空閑さん退院、長柄寮で療養する。
24日	第一一回キリスト教越冬委員会 越冬実医療班の活動報告等 中間報告集会の案内を発送
27日	第一八回（仮称）釜ヶ崎夜間学校 テーマ…日雇労働について 参加者一一名
29日	第一八回（仮称）釜ヶ崎夜間学校 テーマ…日雇労働について 参加者一一名
30日	市民館で、労働者と二月からの活動について

14日	12日	10日	9日	8日	7日	2月5日	1月31日	1月20日	31日												
第一四回キリスト教越冬委員会	中間報告のピラ発送	第二〇回(仮称)釜ヶ崎の歴史	中間報告のピラ発送	中間報告のピラ発送準備	参加者・約六〇人	時・一八時三〇分～二一時	所・天王寺カトリック教会	釜ヶ崎越冬支援中間報告集會	第一九回(仮称)釜ヶ崎夜間学校	テーマ・労働について 参加者一六名	第一三回キリスト教越冬委員会	中間報告集會の打ち合わせ等	釜ヶ崎越冬支援中間報告集會	所・天王寺カトリック教会	時・一八時三〇分～二一時	参加者・約六〇人	中間報告のピラ発送準備	中間報告のピラ発送	第二〇回(仮称)釜ヶ崎の歴史	中間報告のピラ発送	第一四回キリスト教越冬委員会

8日	5日	3日	3月1日	28日	26日	21日	20日	19日	18日	17日					
越冬支援総括集會	テーマ・釜ヶ崎の歴史(2)	第二三回(仮称)釜ヶ崎夜間学校	喜望の家バザー	協友会例会	第一六回キリスト教越冬委員会	テーマ・悪質飯場と労働者の生命	第二二回(仮称)釜ヶ崎夜間学校	三月以降の活動・総括集會について話し合う	第一五回キリスト教越冬委員会	喜望の家世話人会	第二一回(仮称)釜ヶ崎夜間学校	テーマ・越冬と病院	喜望の家の窓口の強化について	第一回ボランティアの会 参加者約二〇名	医療センターにおいて結核の話 本田良寛氏

今年の越冬の特徴

妹尾美喜夫

①

今年の越冬の特徴について書くように言われましたが、毎年毎年、年末年始に労働者が味わう苦しみは同じで、特に目立つ特徴と言うのはありません。

強いて上げれば、今年は幾分、「青カン」している労働者が少なかったこと、例年よりは、医療券で診察を受けた労働者が多かったことが上げられます。

又別の点では、今年は、越冬闘争実行委員会（以下越冬実・地域の労働者で組織）が実質的に分裂したこと、大阪社会医療センター（以下医療センター）前での布団敷きとパトロールが一月三十一日で打ち切られたことが上げられます。

「青カン」が幾分少なかったことは、パトロールの時などによく感じたことですが、そう確かなことではありません。数字の上では前年の一日平均の一八〇人に対して、今年は一五〇人に減っています。

確かな事が言えないと言うのは、固定的な窮乏層は、バタヤさんとなつて、私達がパトロールで回る区域外で「青カン」する傾向があるからです。

だから、ましてや、行政の対応がよくなって、「青カン」が減つたとはとても言えません。困窮が進むにつれて、目につかなくなりいつのまにか死んで行ってしまうと言うのが釜ヶ崎の行旅病死の特徴ではないでしょうか。

第2の、今年は医療券で診察を受けた人が多かったと言うことです。去年は一月二五日から、二月二九日までに発行した医療券は延べ四二三枚でした。

今年は一二月から一月三十一日までに越冬実医療班が発行したもので五二三枚に達しています。これに、今年は越冬実が分裂した為別固に発行した、「炊き出しの会」のものとキリスト教越冬委員会が発行したものを加えると昨年よりはるかに増えていることがわかります。

特に一月二日に越冬実が三角公園で、新春団結もちつき大会を行なった時には、一一六人の人が診察を受け、医療センターを驚かせました。

今年の場合、診察の結果、要入院と診断された人は最終的にはほぼ一〇〇％入院しました。しかし、そのうちわけを見ると、四九一人の実診察数のうち七三人の要入院者に対し、市立更生相談所から入

院した人は、二四人で、三四%にとどまっています。

そして、このような市更相の対応が、川原さんのようなケースを生み出していることは忘れられてはなりません。

一方、今年は、昨年まで越冬実に参加していた「釜ヶ崎結核患者の会」「炊き出しの会」が、意見の不一致の為越冬実に参加せず、分裂したまま越冬闘争が行なわれました。その為、例年の朝、昼、夜の炊き出しは、「炊き出しの会」が西成署裏の公園で行ない、医療券も今年は二ヶ所で発行されることになりました。「結核患者の会」「炊き出しの会」は朝の炊き出しの時公園で、越冬実医療班は医療センターの前で発行することになりました。

越冬実はその他の活動として、炊き出しのかわりに、夜一〇時のパトロールの時にオニギリとミン汁を一月一七日まで配りました。

もう一つのパトロールと布団敷きが一月一杯で打ち切られ、実質的に、一月一杯で越冬が閉じられた事については、特にキリスト教越冬委の方で賛否、両論ありました。

このことは主に越冬実の方針によるものですが、まず実態を把握する為一月一二、一三の両日医療センター前でアンケート調査が行なわれました。さらに実態の把握と、一人一人に即した解決の方法を考える為一月一八日より連日アンケート調査が行なわれました。

病気の人については医療券で診察してもらい、入院が必要な人は入院するように、元気な人については仕事に行くように、現金求人（業者の労働者選別）が厳しく、飯場は条件が悪い為仕事に対して無気力になる労働者が多いが、労働条件が悪ければ仕事に行く中で具体的に皆で変えて行こうと言うことが、徹底して繰り返

し強調されました。

その結果、医療センター前の布団を利用する人の中から病気の人比率が下がり、元気な人で仕事にアブレた労働者が大半になりました。このことをふまえて、越冬実が一月三〇日に市民館で集会を開き、参加した労働者と話し合った結果、一月三〇日で布団敷、パトロールを打ち切ることになりました。

後にキリスト教越冬委の総括集会では、二月に入ってから寒波が押し寄せ凍死が相ついでことにより、パトロールだけでも、もう少し続けるべきではなかったかと言う意見が出されました。ただ、パトロールや布団敷が根本的な解決にならない以上、打ち切りはやむを得ないものがあつたと思われまます。ただ、緊急にパトロールが再組織されれば、幾人かを凍死から救うことができたのではないかと、悔いが残る所です。

2

越冬が終わって半年が過ぎようとしています、今釜ヶ崎では、その後も求人が極端に落ち込みアブレが深刻になっています。

そのような中で二月二三日に、三重県のコ部屋中沢組が警察によって摘発されました。それによると、中沢組の経営者、中沢沢夫は去る一月一五日に三重県の飯場内で日雇労働者中沢清美さん（四八）を逃げようとして角材などでなぐり殺し、大阪南港の空地に捨てたと言います。

仕事が減って来て、多くの労働者が飯場に行くようになるときまって労働条件が切り下げられ、この種の暴力事件が増えます。『越冬』と言えば冬だけの問題のように聞こえますが決してそうではありません。いわば年中が『冬』の状態ですが、文字通りの冬

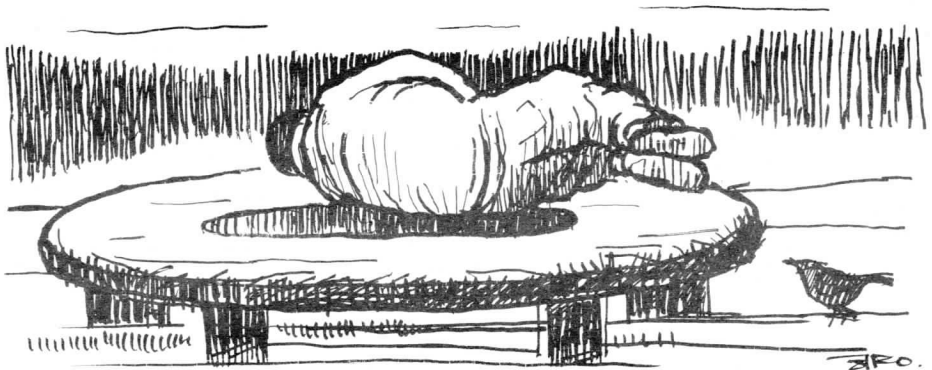
には、寒さが加わることによって総仕上げをすると言うことができます。

私達は「一人の死者も出さな／＼」をスローガンにしていますが、最初の頃の越冬委員会の話し合いではその事に対する疑問も出されました。それは現実的に不可能だし、逆接的な言い方ですが、「冬場」だけの取り組みだけでは不可能だからです。

私はさらに、福祉的な発想だけではもはや取り組めないのではないのか、と言うことをつけ加えたいと思います。

なかなか入院しない病気の労働者に対して本人の「やる気」と言うことが言われますが、やる気も自分の労働が正しく社会から評価されない所ではできません。

同じく、仕事がないと言うことは飯が食えないにとどまらず、生きていく目的の一つ——何物かを生み出していく——が欠落していることに他なりません。労働の問題は確かに難かしいものがありますが、果たして本当に取り組むことはできない事なのでしょうか。



初めて越冬に参加して

「釜ヶ崎と教会」というテーマで越

冬にかかわったのであるが、それが「日雇労働者とキリスト」というテーマに変わっていった。というのは釜ヶ崎を一つの集合体として把える時、そこではひとりひとりの日雇労働者の顔が見えてこず、問題解決の糸口さえ、ボーンとして見えてこないという限界があるからだ。

さらに、教会をキリストと変えたのは、教会のイメージがあまりにも固定化したものとなり、キリストの命が見えてこないためである。

大切なことは、ひとりとの交わりを深め、ひとりとの関係の中で、キリストと共に生きることであろう。わたしとAさんとの関係、わたしとBさんとの関係を大切にしたい。

越冬において、あるひとりの人と関係を深めることはできなかった。しか

し越冬は、そのような関係を育てる以前の、最も基本的な働きかけだと思う。「一人の死者も出さな」というスローガンは、越冬の基本姿勢だと思う。まずは、生きていることから次の一歩を踏み出すことができる。

越冬は生命の尊厳に根ざしていると思う。

三浦 恒久

初めて越冬に参加して

何故、カマ・ガサキのエッ・トウに行くのか？それは自分にとって何を意味するのか？慈善の意ではあるまいにヤ、釜ヶ崎は、私のこれまでの「生」を覆した場であるから―多くの人々の辛苦の上に跌坐をかいていた自分の生を

。釜ヶ崎には、多くの人権を剝奪され、独り生き、死んでいく（殺されている）人がいる。女である私が夜間パトロール等に参加しやすいベースが備えられ

ている。色々と思い惑っていたが、私が女であり、ホームベースを持つ者であり、現状を甘受している私の闘いを釜で行い、それを厳格に受け留る為に私は釜に行った。

自分の闘いの場に釜が必要なのは、私の弱さの何ものでもなく、釜を利用しての自分に（他の支配者・社会構造と何ら変りない自分に）深い憎悪を感じつつ、それと闘う他なかった。その痛みを背負わねば一歩も前進し得なかった。胸打ち、嗚咽しつつ。

コンクリートに囲まれた釜の冬は寒い。冷たさがしんとしみてくる。道端に寝ころんでいる人に昼は声もかけない。お昼は大丈夫という変な安心もある。彼らなりの生活もある。人が多い。何故、夜ならば一人一人に声をかけるのか？生命の灯が消えるのをくいとめたい／＼しかし、毎日、昼夜のそれを繰り返さざるを得ない「おじさん」と我々は何であるのか？相互の間に何かがあるというのか？コンクリートの冷たさがしんと浸ってくる。昼も夜も、道で寝ている人を異常だとは思わなく

なっている。「また、いやはった」という調子、尋常ではないというのに、異常と思わなくなっている。馴らされてしまっている。

道で人が凍えている。青カンしている人がいる。夜、パトロールをする。

一人一人のおじさんの生活があり、思考がある。私の価値感では図り得ないものがある。しかし、人間がこれ程までに生命の危機に晒されてよいものだろうか？明らかに人権を剝奪されている。憤怒が体中を巡る。「おじさん」はこの怒りを感じないのか？拳を握る。この「怒り」を私は奪われていた。感じずに済む世界をつくられていた。より強く胸打ち慟哭する。

一つだけ進歩したのは、何人かの人と「おじさん」「ねえちゃん」の関係でなく○○○○さんと楯本文子に成り得る。一人の人間としての氏名をとり戻すことができた。一人一人との出会。私の闘い／今、○○さんたちは、病院を一度出て再入院したり、行先知れずだったり。願わくば人間として自分の思うところを生きていてくださら

んことを。が、私自身はその一人一人との関係を継続しきれずに安閑としている。許すまい、この自分を／善処せよ／人の痛みを背負いきれない自分の痛みを背負い続けよう。それが私の闘いだから。

釜の越冬は夜間パトロールだけでなく、昼も無断続いている。冬を越える為に冬を迎える為に、釜の解放に向けて毎日毎日が闘いである。そして、その日一日を労苦して下さっている方々。頑張っている○○さん達。

私は釜に行来する人間でしかないが、弱く許せない自分、怒りを持つ自分、こだわりを持つ自分、痛みを持つ自分を釜のおじさんに十四日間の簡易宿泊所を与える様にパンソウコウを貼ってごまかすのではなく、根底から受け止め、負い続けこの弱さ、痛み故にそれを力として歩み続けたい。そうその力につきうごかされるのだ。そして釜から与えられたものをいつか必ず還元し得る様、日々努力して生活したい。

楯本文子

パトロールに参加して

二月の末、寒さの厳しい朝であった。飢と寒さと病苦に打負けて、一人の労働者が凍死している姿を見た。古里があっても帰ることも出来ず、妻子があっても逢うことも出来ず有って無い、孤独な生涯の幕を、絶望と不安と、病苦の中で閉じてしまった。一人の人間。虚しい心の旅路を彷徨う、労働者の終着駅は、行路病死であるのだろうか。年間をじてこの様に死んで行く人は、三百名を越えるとか、パトロール、それは、「人間の生命の尊厳」に対する服従である。そこに私自身の生命がある。一人の人間の生命は地球よりも重い。

『友のために、生命を捨てる愛より、深い愛はない』

聖言葉が私を勇気づけて下さる。

谷満繁

越冬パトロールに参加して

日本の社会構造を底辺で支えているのが「釜ヶ崎」だ、などと分析してみることは大切なことだが、いや、まさにそこを打たなければ何にもならないのだが、「一人も死者を出さない」闘いは何にもまして緊急性をもっている。そして又継続されなければならぬ。

「今晚は冷えるな、死人がでるかもしれないな」というパトロール仲間の声に、ともすれば青カン者の数を確認し、ただ歩くだけではなく、とにかく声をかけ、できれば話をするのが必要だ。勿論、不特定の人々で「対話」といえるものではないが、それでも短い時間で仕事とのことや病気のことなどを聞き、我々でできることはわずかではあるが、理解を深めることができる。

私はふだん、何もできぬものだから、夜のパトロールだけに参加させてもら

っているが、ことは決して労働者だけの問題ではなく、参加する我々自身についても自立と解放を目指すものでなければならぬ。パトロールが終わると、時々重苦しい気分させられる。逆に我々が「見られている」ことに気がつくからである。

後藤 聡

パトロールに参加して

その日は、大晦日で、午後十時頃には、センター前には、四十人程の人が、ふとんにくるまっていた。新聞のニュースで知っていたつもりだったが、その現実との差にすごいショックを感じた。

コンクリートの上にゴザを敷き、その上に夏のふとんに、ポロの毛布、体をかかえ込む様にしてくるまっていた。南回りについて行く。そして三角公園についていた。何年前前には、テントが張られた所だ。

たくさんの人が、たき火をしている。酒に酔っている人もあれば、病身なのか、灰まみれになっても身動き一つしない人。真冬の空の下で、一晩どう過ごすのだろうか……。

ともかく、体の具合の悪い人や、ケガをした人達は、センター前へ保護をした。

最後にセンター前で、保護者や、青カンの人数の連絡があり発表されるのだが、聞いてはいなかった。一晚のパトロールで見た現実に、最初に受けた以上のショックを再び感じていた。このまま帰る事に、こだわりを感じた。家族も居れば、暖いふとんがある。その自分と、この人達との関わりって何や……。

家に帰り床についても、長い間寝つかれなかった。

パトロールは、一月末で終わったが、自分ももっと、釜ヶ崎と関わりたいたいと、パトロールは冬だけでいいのかと言う疑問とで、今でも、金井先生と毎水曜日に、廻っている。

梅村 登志和

病院訪問

地域にある病院を訪問し始めて一年半になる。「ようけ来んかったな、病気にしとたんちやうか？」訪問は週に一回と決めているがたまたま、二週間振りに顔を出すとこんなことばで迎えられる。

はじめは「いかがですか」「お大事に」と余りことばをかわすことがなかったが、この頃ではお互いに会話が多くなった。

入院生活四年、六年位の人は珍らしくない。自分の病気は治るのだろうかという不安、健康には自身があつたのに病気になったショック、あちこちの病院を転々としたこと等、ぼつぼつ話されるのを聞くと、次の訪問日の足どりが重くなる。しかし、家族との音信も途絶え、見舞いに来る人もいない患者さんたちにとって、「こんにちわ、いかがですか」と声をかけ、シンドイ

話を聞くことが少しでも喜びであれば・・・と思う。

広島出身のMさんは昨年の十一月に他の病院に移ったが、移る前のMさんはまったく歩かず、いつ行ってもベントに横たわっていた。二月にMさんを訪問した時、どンドン歩いてトイレに行き、洗濯さえも自分でするというMさんが同一の人とはどうしても思えずにいる私を、Mさんはおだやかな笑顔で迎えて下さった。私は、あのMさんの美しい笑顔に会いたくて、三十分の道のりをベタルを踏んで訪問に出かける。

重野了子



病院訪問

長い寒さからようやく解放され外の日だまりにほっとしたかのように、しゃがんでいる人々、暖い笑顔で、おはようと迎えて下さる。

ああ今日も訪れてよかった。このほほえみに励まされて病室に入る。この病院にあの病院に数知れぬ多くの人が人生に疲れ労働の重さに倒れ、又年老いてあるいは不慮の事故のため予期しない人生の試練の中に一日も早く解放されることを心の中で叫びつづけている。釜ヶ崎の病む人の苦しみは深い。自分自身を大切にするために忍耐することから始めねばならない。共に働き酒を飲む仲間からはなれ、孤独の中にじっとこらえている。少し良くなる能耐えられずしてとび出す。その結果は良く知っているんだが・・・オレの意志は弱いんだと言いながら酒を飲む自分の弱さのはがゆさを怒りそしてぶ

つける、自分のような者誰れが心にかけてくれるか。

又いやな思いをしながら入院する。このくり返しの中で考える。病院は病む人は病院のためではないだろうか。病院のたてまえは病人の福祉である。しかし、治して「やる」治して「いただく」この「やる」と「いただく」の間に絶体的な権威その威力が狭まり「いただく」者にとってはすべて受身、自分の体であっても自分の病いの状態を知る権利が奪われる。自分のためによかれと遠慮しながら相談する、それを聞きたいことの10ほど、そのおどおどにつけこむかのように叱ったりする。しかたなく「いただく」身は、すみませんとさがる。又長い闘病生活をしている、薬が変わったことはもちろん注射の仕方、看護婦の足音にも敏感になり、状況判断をし、それに対処するすべを覚える。こんなことがあった、注射の薬の間違いを知り、びっくりして医師に知らせる、医師は自分のブライドを傷つけられたくない。カルテをくり間違いを知りながら白ける。「お

まえ何故それを早く言わないのか、「前に言いましたよ」医師はブイッと部屋を出る。患者はブツブツ煮えきらない気持と不安で怒りすらこみあげてくる。して「いただく」身の弱さ、これも行路病者だからだろうか。又病いの重荷だけでない。時にはもっといたたまれない気持になる。部屋で共に顔を合わせている中から思いがけなく発生する心の行き違いである。環境も性格も二人と同じものでない違いの集りがある時ぶつかって、当然なんだがやり切れなさを感じる。ゆるすこと赦されることのなんとむつかしいことか。しかし、そう言ったことは、まあなんとか一日一日を送る中に消えて忘れることも出来る。「心の貧しい人は幸い」とおっしゃったキリスト。釜ヶ崎の老人が一人、誰れ知ることなく神の御手に抱かれた。その時を知ってか知らずか、しきりと私は勝手気ままをしたのに、私のようなものを訪れてやさしい声をかけて下さってありがとうよと言って言たっけ。「私のようなもの」と自分を知って始めて、「いただく」身

のつぶやきでなく感謝の心がほつほつと湧いて来たのだろうか、ぶつぶつ煮えきれない心が煮えきる時、ほつほつと喜びに変わるのだろうか。

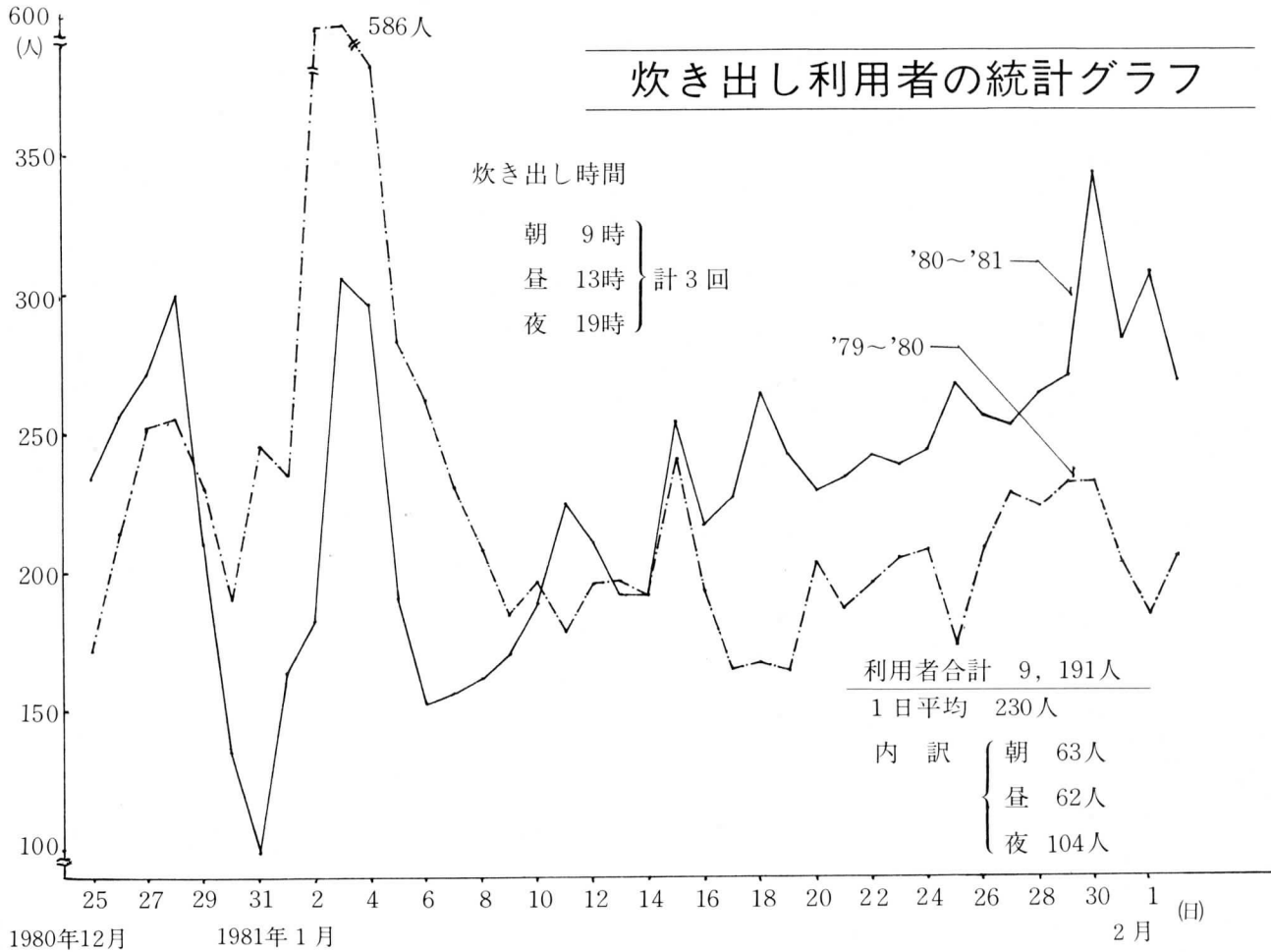
あの日だまりの中で病む人の笑顔が、訪問に向う足を強め心に勇気を与えて下さる。

汗と力を出しきって苛酷な労働に従事し病む労働者たち、彼らをもっと理解しつぶやきも怒りも共有し、ほつほつとした喜びにつながっていきたい。

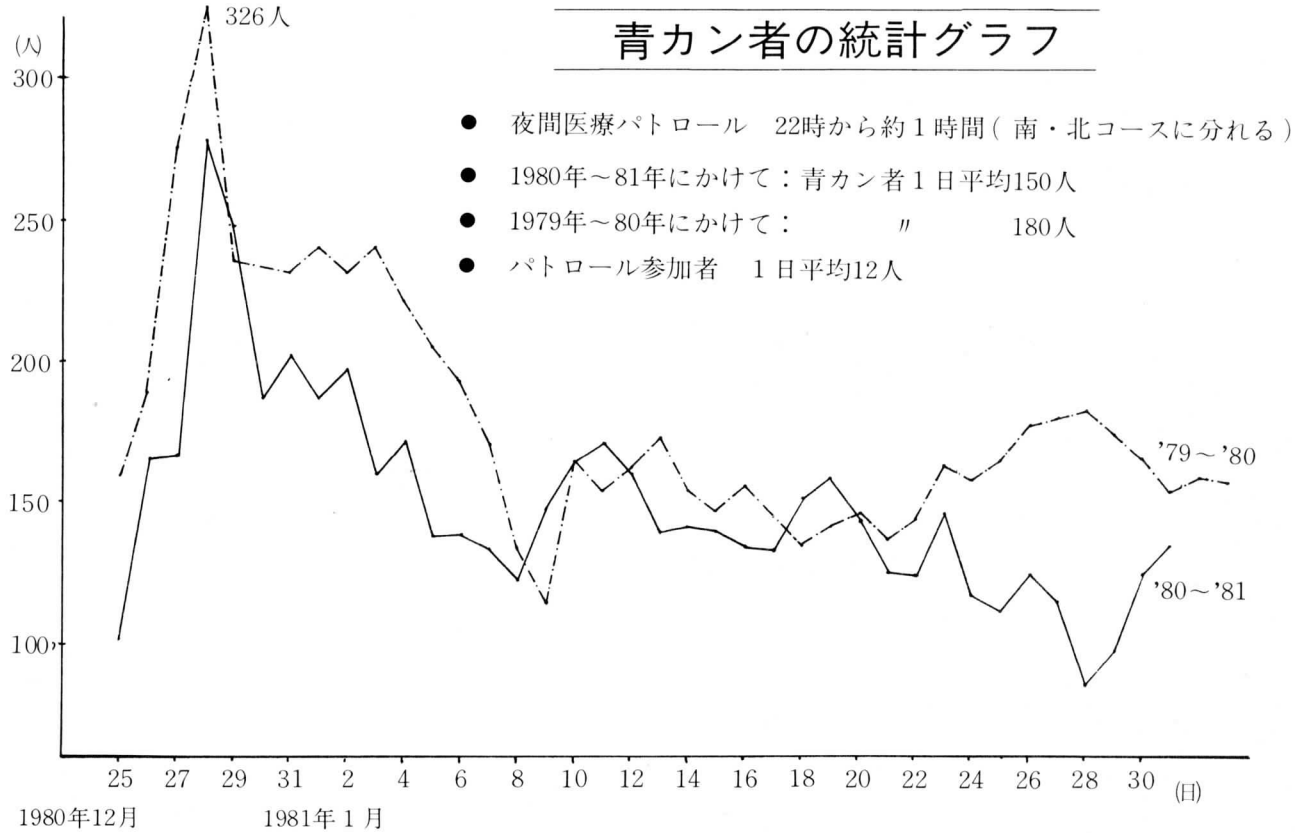
シスター・岡風呂



炊き出し利用者の統計グラフ



青カン者の統計グラフ



あたたかい支援の手を冬の釜ヶ崎へ——一九八〇年

釜ヶ崎の越冬に二六〇〇万円のカンパを!!

釜ヶ崎からの呼びかけ

釜ヶ崎の小さな働きを全国の各地で支え、はげまして下さることを感謝します。

第一〇回の越冬闘争支援後も、わたしたちは「釜ヶ崎の病氣」をテーマに今日まで活動してきました。ここにまた、冬を前にして現場で働いて来た者からの呼びかけをいたします。

昨年のおみなさんの越冬へのカンパは、七〇六八、八九二円でした。有効に活用させていただきました。ありがとうございます。

十六年目の感謝

十六年前、釜ヶ崎で働いていた教会の関係者は二人しかいませんでした。二人とも属している教会から迫害されたといっても普通では無いと思います。その二人の一人がやめて、別な所へ行つてしまいました。もう一人は一人で頑張りました。何年も教会の助けなしに一人で頑張りました。

今年、協友会は十周年記念日を祝っているばかりでなくて、越冬の働きも六回目を迎えることができました。協友会の力だけでこれほどの大きな働きは決してできません。

皆様のたすけでここまでできました。十六年前のたすけの力と今年の皆様の合わせた力とでは、どれほど違うでしょうか。答えは簡単です。

これからも一人でも頑張ります。十六年がかかっても二〇年がかかってもいつの日か良いことが起ると信じます。

皆様にただ一言、心から感謝をもうし上げます。

西成ベビースタター
E・ストローム

釜ヶ崎の結核

結核は人類とともに発生し、数千年の歴史をもち、旧約聖書のレビ記26：16、申命記28：22の二ヶ所に記されるなど古い病気である。

今日では、結核対策が強力になされ、日本では死亡率第一位の座を他の病気にゆずりわたしたが「釜ヶ崎」では、いぜんとして、結核による苦しみの遺産が重くのしかかっています。日本キリスト教海外医療協力会から派遣され、ネパールで結核の撲滅のために闘った岩村忠医師が、釜ヶ崎に来た折に「これは、日本のネパールである。私がネパールに行く前に釜ヶ崎を知っていたら、自分は、ここに来ただろう」といった言葉を忘れられることは出来ない。

その結核の町釜ヶ崎に住んで十二年目に、私も発病し、入院、静養の身となった。幸いに、私は、保険もあり、多くの人々の祈りと、経済的な支援によって闘病の生活を断ることゝゆるぎされていく。しかし、釜ヶ崎の住人としては、苦しみにあえいでいる他の労働者諸君に相すまぬことだと思つている。病いから解放されて、再び釜ヶ崎で働く日も近いことであるが、私の働きの大切な一つに、「釜ヶ崎における労働者の結核からの解放」という項目をつけくわえたいと念じている。「釜ヶ崎の結核」という原点を直視しながら私たちは、

アジアの結核や貧しさの問題と連帯したいと思う。この視点を欠いて、ネパール、インドなどの問題に、とびつくことは、信仰的には不誠実であり、問題の本質をぼやかしてしまふことになってしまふ。

日本キリスト教団いこの家
金井 愛 明

結核ケースワーカー

としての一年間

皆さまのあたたかい援助に支えられ、無事一年すぎました。心からお礼申し上げます。

はじめは慣れることで精いっぱいでしたが、今では労働者と直接関わり、結核の予防、治療などのお手伝いをさせてもらっています。午前中は、結核予防法三十五条の人（排菌患者で即入院を要する人）百名に対して、大阪社会医療センターで調査をさせてもらいました。一人一人とゆつくりと話ししその人のもっている問題点の多いことに気付かされました。単に結核だけ見て、薬を身えるだけでは結核は治らないことがわかりました。

例えば、「もし元気がなくなったから、誰か喜んでくれるんやが」といって飲んで、酒をのまないで結核を治すより、このまま酒を飲んで道路で死んだ方が幸せや。また「結核を治したから、本当に働けるんが心配や。」などの声が出ました。

その声を聞き、患者のもつ精神的な面または社会的な面そしてアルコールとの関係など、むずかしい面がいっぱい出てまいりました。午後からは、労働者のたまり場である三角公園や路上で、労働者と話したり、病気の相談のついでに、毎日色々な人と出会います。こちらが、教えてもらうことがたびたびです。また一人一人大きな可能性をもつておられることに気付きます。

結核については、入院しても治療期間が長く、途中でもう働けると思ひ、自己退院する人もかなりあります。また軽快退院しても毎日、日雇のきびしい労働では、一年としないうちに再発してしまいます。そのような中で如何にすればよいかといふ考えさせられます。今のところは、一人でよいから徹底的に関わり、その人をモデルケースとし、その人のまわりから、もう一人の人が起され、またその人のまわりから一人の人が起され、労働者同志で手をとって行けるように、またそのお手伝いが、できればと願いつつこれからも頑張りたいと思います。

どうぞさらに覚えて下さい。

入 佐 明 美



三角公園で医療相談中の結核ケースワーカーの入佐明美さん



第一回患者交流会に参加した人たち
於 喜望の家（二九八〇・五）

結核患者交流会

釜ヶ崎の多くの入院患者の問題の一つは、退院後、自立するまでどうするかと言うことです。長い闘病生活のため体力的に就労は無理。むしろ入院している間は、治療と生活の保障があるが病院を出ても入院のくり返しの人生を送る人も少なくないのです。こうした問題を少しでもなくするため退院を間近に控えている人々を招き、「入院生活の問題、また、これからの生活に備えての心がまえ」、「福祉から保護を受ける方法や手続」等、確かな方向づけがあることに一人一人が希望を持って自分を大切にするように、お互いが聞き手になったり支えになったり、出来るだけ一人でも建設的な人生の歩みに向う意図のもとに、二ヶ月に一回共に集い、楽しいレクリエーションや昼食を交えた患者交流会を持っています。

愛徳姉妹会
シスター岡風呂

医療相談から

医療相談は、労働者との出会いの、いわば最前線である。協友会の各窓口には、昼夜を問わず、毎日、さまざまな問題をかかえた労働者が相談に訪れる。常連は別として、労働者はギリギリの線まで我慢して、もうどうにもならないところで、恐るおそる窓口に立つのである。そこでは、現実のありのままの姿を受けとめるだけの感受性が要求される。一人ひとりの必要度（ニーズ）を明確に把握し、適切な措置を講じなければならぬ。資源の紹介、診察依頼等の発行、救急車の手配、そして何よりも回復への治療体系の組立てを助言する。しかし、たとえば、希望の家には毎日十人以上の相談者があるが、キッチリした関係を確立できるのは、その一割にも満たないのが現実である。窓口のスタッフの確保、ニーズにあったメニューの準備、各資源との関係確立が緊急の課題となっている。

—福音ルーテル教会—
希望の家
重野信之

キリスト教医療連絡会

越冬が終わった五月はじめ、わたしたちは越冬のテーマ「釜ヶ崎の病氣」を年間の活動テーマとするに決定して、キリスト教医療連絡会を発足させました。目的は、結核ケースワーカーとして働く人佐明美さんを支えること、また、越冬期間中にできた医療相談、十六以上もある病院訪問を出来るだけ有機的にすすめるためでした。その活動の中から「患者交流会」を五、七、九月に催すことができました。また、釜ヶ崎地域問題研究会の協力で「医療ニュース」を出し、入院中の患者同志が作品上で交流したり、闘病生活へのげましの言葉を送ることができました。また、はじまったばかりですが、釜ヶ崎で一人の結核患者が治り、自立して生活することが、釜ヶ崎の変わる一歩であることを信じ、これからも活動を続けたいと思えます。そして今年の越冬期間中も特に「釜ヶ崎の医療」をテーマに、みなさんの支援のもと、労働者とともに一歩一歩進みたいと願っています。

関西労働者伝道委員会
小柳伸顯

労働者の家の実現へ

三年前から、越冬の夜間パトロール中、公園や橋の下でおかん（野宿）している労働者を見るときいつも考えました。「体の病氣や衰弱のためもう働くことができないで、どこにも行く所のない労働者のために何かができるのか、生活できる場所がないか」と。こういう労働者の家をつくるために、二年前から越冬の募金からも毎年一〇〇万円ずつお金をためてきました。この秋、やっと適当な家を見つけました。来年の春にあく予定です。今年の越冬に間に合いませんが、来年は普カン者にとって、希望と光の年になりますように、今年も皆様のご協力をお願いいたします。

聖フランシスコ会ふるさとの家
S・ハイリッツヒ

一九八〇年度活動予定

- 一、行政への働きかけ
- 一、医療活動
- 一、結核ケースワーカーの活動
- 一、医療相談（入院、生活その他）
- 一、病院訪問（年周を通じて）
- 一、炊き出しへの支援

一九八〇年十一月

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

代表・小柳伸顯
（釜ヶ崎協友会・関西キリスト教都市産業問題協議会）

支援の先
支那の先
冬支の先
連絡の先
越冬の先
力送の先

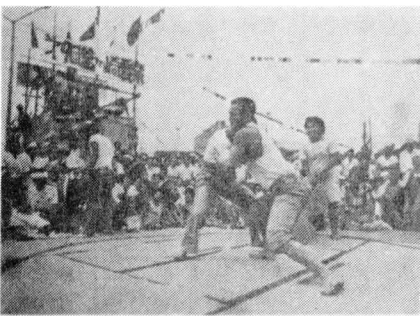
大阪市西成区萩ノ茶屋二一八一十八
希望の案内
キリスト教釜ヶ崎越冬委員会
電話 大阪(〇六)六四七一三九四六
郵便振替口座 大阪五〇三八五



労働者に衣料を安く提供する古瀬バザー
於 希望の案内



第十回越冬闘争炊き出し風景
於 萩ノ茶屋中公園(一九八〇・二)



第九回夏まつり風景
すもうをする労働者
於 三角公園(一九八〇・八)